

日産プレジデント基金 ～被災地の子どもたちに笑顔を～ Newsletter

VOL.5



日産プレジデント基金は、日産自動車株式会社の支援を受けて、東日本大震災で被災した子どもたちの笑顔を取り戻すためのプログラムを、日本NPOセンターが多分野のNPO、児童館、学童保育と連携し、実施するものです。あそびプラスOneプログラムでは、児童健全育成推進財団の協力を得て、子どもたちの日常的なあそびの拠点である児童館に、多様な専門性を持った県内外のNPOが訪問してプログラムを提供しています。おでかけプログラムでは、被災してから、自由に外で遊ぶことが制限されたり、フィールドに出る機会が激減している子どもたちに、長期の休暇を活用して、フィールドに出かけ、さまざまな学習や体験、あそびを通じて、元気に過ごせる時間を提供しています。

<第3期(2014年9月～2015年2月まで)の実績>

あそびプラスOne：12団体が55施設でプログラムを実施。

おでかけ：2つのプログラムを実施。



プログラム
実施団体の
インタビュー



「あそびプラスOne」をきっかけに

特定非営利活動法人NICE (日本国際ワークキャンプセンター)

今年創設25年を迎えたNICEは、「あそびプラスOne」で初めて児童館や学童クラブに関わり、世界の若者が一緒に活動するプログラムを実施しました。NICEが見てきた被災地の子どもたちの姿、活動が組織に与えた影響などについて、上田英司事務局長からお話を聞きました。



Q. 「あそびプラスOne」で2年間ご協力いただいた後、今年度は自主事業として児童館での事業を実施されましたね。

1期目に3ヵ所、2期目に11ヵ所で活動させていただき、児童館と良い関係を築くことができたので、自主事業として継続することにしました。今年度は、児童健全育成推進財団の全体コーディネートの下で、継続した児童館と、なかなか支援ができていなかった児童館で活動するようにしました。

Q. 児童館を通して活動する魅力はどんなところにありますか。

- 子どもたちが安心して過ごせる場となる児童館は、地域の信頼関係の広がりを感じさせてくれます。
- 気仙沼市の鮎立児童館のお祭りは地域のお年寄り

が支えていました。仙台市の大竹児童館のために地域の人たちが白菜や大根を植えていて、中学生も遊びに来ていました。地域に開かれている、ボランティアに対しても感謝の気持ちを持ってくださる児童館での活動はやりがいがあります。

Q. この3年間、子どもたちや地域での変化をどう感じますか。

1年目にはちょっと余所行きだった子どもたちが、2年目には普段どおりの顔を見せてくれます。児童館の参画・協働も高まり、地元の神社を宿泊場所として提供していただいたり、地域のコーディネーター役になってもらったり、会議を開いて方針を決めて合同開催したり、といったことができるようになりました。



として加わりました。私たちが提供しているのは海外のゲームを紹介するプログラムですが、「直輸入」してもルールや手順がわかりにくい、ポディタッチが多いなど、子どもたちに届けるには難しい場合が多いのです。海外と日本のボランティアでデモと修正を繰り返して児童館側に提示して、さらに調整していくという手順を、形式としてまとめることができました。被災地に関わりたいという世界中の若者に活動の場を提供できることは

印象的なのは、福島市のたかくら家Kid'sハウスでの出来事です。2012年に訪問した時は、外あそびの制限もあり体育館での活動でした。困難な状況でしたが、学童の指導員さんはとても明るくされており、私たちが楽しく過ごしました。2013年は野田小学校仮設校舎の教室を借りて実施しましたが、指導員さんの様子が少しおかしいな、と感じました。プログラム終了後に、窓口になってくださった方がお茶を飲みながら涙されていたことが、とても気になっていました。2014年に訪問した時、涙の真意をうかがったところ、「2012年は子どもたちを守ることに注力していればよかった。でも、除染が終わり、子どもたちをどう守ればいいのかわからなくなっていました。それでも前に進まなくてはならないと、がむしゃらになっていました。あの日お茶を飲んだ時に、はじめて心が休まり、涙が止まらなかったんです」と話してくれました。この言葉に、子どもたちを取り巻く環境の厳しさを感じました。

Q. 「プラスOne」の活動はNICEにどのような影響を与えましたか。

国際理解につながるゲームを作って児童館に届ける、というプログラムがNICEの国内キャンプの新たなメニュー

NICEの目指すところでもあります。台湾から参加した大学生は、「1999年の台湾大地震の時、小学生だった僕はずっと日本の皆さんから受けた支援への恩返しをしたいと思っていましたが、やっと実現できました」と感謝していました。

Q. 今後の活動はいかがですか。

得られたノウハウから、大学と連携して児童館にプログラムを届ける活動や、企業と連携した社員ボランティアプログラムがスタートしています。より多くの大学や企業と連携して、被災地以外の地域も含め、活動を広げていきたいと考えています。



あそびプラスOne

プログラム



笑顔バスがやってきた

津軽石学童の家&赤前学童の家×特定非営利活動法人みやぎ・せんだい子どもの丘

2015年1月16日、岩手県宮古市の津軽石小学校の体育館には、津軽石学童の家から16名、赤前学童の家から10名の子どもたちが集まり、クラウンのマイティノームさんと一緒に遊びました。津軽石川から1キロ以上離れた小学校の校庭には、震災当日、川を遡上しながら防潮堤を乗り越えた津波が到達しました。津軽石学童の家の坂本施設長は、「つらい経験を乗り越えて、避難先から戻ってきたばかりの子どもたちもいます。復興の進捗に子どもたちの生活も左右され、まだ道半ばです」と、子どもたちの今を語ってくれました。

第2号でもご紹介をした「笑顔バス」は、これまでに約15万キロ被災地を走り続け、岩手県、宮城県、福島県内の子どもたちを訪問しています。津軽石学童の家に到着すると、すぐに子どもたちに取り囲まれました。「ピエロはどこ？」とワクワクしながらも、上履きを取りに戻り、小学校の体育館に移動しました。誰に言われることなく、体育館の外にきっちり揃えられた運動靴が印象的でした。

みんなが大きな声で「ノームさん!」と呼ぶと、ピョンと登場。ノームさんが、あそび歌や手あそびをやっていくうちに、子どもたちの笑顔は満開になりました。相棒のレッサーパンダ「ポンちゃん」とのやりとりで大爆笑。大きなナイフでのお手玉には、みんなビックリです。

最後にノームさんから、牛乳パックで作った「パクトンボ」をプレゼントされた子どもたちは大喜び。縦横無尽に体育館を走りまわる姿に、普段の様子を垣間見た気がします。

学童の家に戻って子どもたちはおやつの時間。み

んな「楽しかった〜!」と大満足でした。男の子たちは特にナイフが本物だったのかどうか気になる様子。近所のおばあちゃんがつくってくれたお手玉が届いたばかりとのことで、3人の女の子たちが練習の成果を披露してくれました。

地域の人たちに見守られながら、子どもたちが安心して過ごせる居場所としての「学童の家」の大切さを改めて感じさせてくれる訪問でした。そんな温かい場所で、子どもたちも指導員さんたちも笑顔満開になれるひと時でした。



特定非営利活動法人みやぎ・せんだい子どもの丘

子どもと子どもにかかわる大人に対して、人と人が出会いながら多様な体験ができる場を提供することを通じて、子育て支援や地域での健全育成活動を行う団体です。あそびプラスOneプログラムでは、クラウンによるパフォーマンス、クラフトやあそびうたコンサート、人形劇など、多様な表現活動のメニューの中から児童館のニーズにあったものを届けています。

表紙の写真提供:久慈学童保育所第一みつばちの家(岩手県久慈市)、鶴住居学童育成クラブ(岩手県釜石市)、
渡波地区放課後児童クラブ(宮城県石巻市)、万石浦地区放課後第1児童クラブ(宮城県石巻市)、
翁島児童クラブ(福島県猪苗代町)、塩沢学童保育所ひだまりクラブ(福島県二本松市)、
うつみね児童クラブ(福島県須賀川市)、柏城児童クラブ館(福島県須賀川市)、関迎小児童クラブ(福島県白河市)

編集・発行:



認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター
〒100-0004 東京都千代田区大手町 2-2-1 新大手町ビル 245
TEL 03-3510-0855 FAX 03-3510-0856
Email jncenter@jnpoc.ne.jp
URL www.jnpoc.ne.jp
Twitter jnpoc

運営協力:一般財団法人児童健全育成推進財団
制作:一般社団法人経団連事業サービス

日産プレジデント基金

Facebook: www.facebook.com/NissanPresidentFund

ホームページ: www.nissan-president-fund.jp